



ハメ撮りファンタジー

～僕の知らないあの子の素顔～



リーシャ
明るく元気な新米騎士。
同期の幼なじみには
当りが強いが上司から
かばうなど常に
気にかけている。



主人公
僕

新人騎士。
最近急に
幼なじみの事
を意識しだす。

ボーマン

北門守備隊の
隊長であり
二人の上司。

第三章
騎士編

フロリカ
王宮内の小さな聖堂で
働いている清楚な神官。
主人公と同じ趣味の話で
意気投合する。



主人公
俺

王宮内の
文書管理室に
勤めている。

リビト

主人公の同僚
貴族のボンボ
ンでチャライ。

第三章
神官編

ベアトリーチエ
王亡き後の小王国を
切り盛りする賢母と
名高い王妃。一人息子の王子に
王族として厳しく接する。



主人公
私

跡継ぎの王子。
王都への留学
を夢見ている。

トウフク

王国有数の
商人。王家の
財政改革に
協力する。

第二章
王妃編

映昌石とは、元を辿ればサキュバス族の得意とする水晶魔術を解析した最新の魔導技術である。北方戦線における魔族への偵察や監視といった軍事的な需要に応える形で開発が進められていった。近年では一般にまで広く普及した映

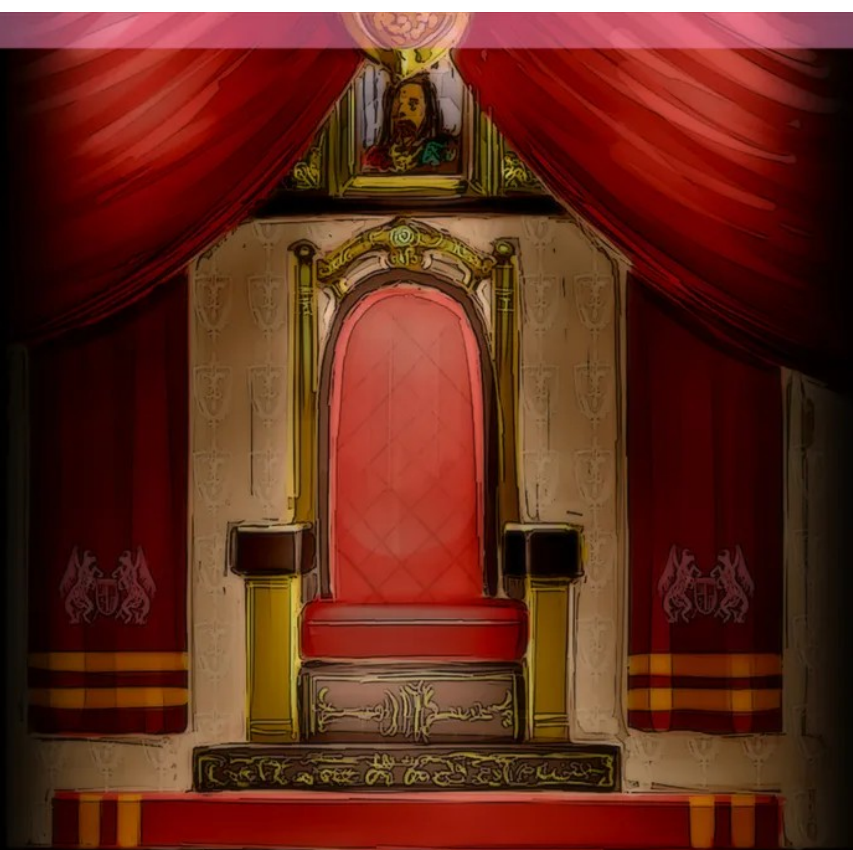


昌石を小型化し、さらに様々な機能を追加したのがこの映昌機である。各地の士官学校や騎士団に配備されつつあるこの小さな叡智の結晶は、必ずや我ら人族に多大なる福音をもたらすであろう。

A throne room with a red throne and curtains. The throne is ornate with gold and red. The room is dimly lit, with a red curtain hanging above the throne. The text '第一章 王妃編' is overlaid on the image.

第一
章
王妃編

玉座の間には誰も居ないようです。私はその静謐な空間の中心に飾られた肖像画を見上げました。厳かな顔付きは先代の王、即ち私の父上。この小国の財政再建を目指すも志半ばで病死なされてしまい……。



当然跡を継ぐのは唯一の長子たる私。ですが目の前の玉座に座るのは、まだ先の事となるでしょう。それまでは朝から晩まで厳格な家庭教師たちに囲まれる日々が続くと思うと、少し憂鬱です。

「これはこれは、王子殿下。相変わら
ずご聡明なお顔立ちですなあ」
背後から懇懃な挨拶。
振り返ると恰幅の良い体になこやか
なえびす顔が鎮座しています。
「ああ、トウフク殿でしたか」



王宮の御用商人である彼は、裸一貫
から始めた小さな商會を王国有数の規
模にまで成長させ、いまや莫大な金額
を指一本で動かせるのだとか。
父上も財政再建の折には彼の力を頼
りにしていたと聞きます。

「今日は何か用事でも？」
「まあ、少しばかり野暮用がございま
して……」
せわしない揉み手と満面の笑み。眼
前の商人に気圧されていると、それを
破るように凜とした声が響きました。



「何用かトウフク、例の件は後日にと
申した筈だが」
「こ、これはこれは。ベアトリーチェ
王妃様。い、いえ、軽いご機嫌伺いと言
った所です、へへへ」
叱声に思わず私まで首をすくめます。

鋭い眼光の前に、トウフク殿も笑顔
をわずかに強張らせながら大人しく退
散するしかなかったようでした。
商人を一声で追い払ったのは誰あろ
うベアトリーチエ王妃。私の母上です。
父上亡き後、若輩の私に代わりこの



小さな王国の摂政を務め、その喪服姿
から王国の黒真珠や黒衣宰相などと呼
ばれ民に慕われているのだとか。
また王宮内では皆に厳しく接してお
り、私の家庭教師の中で最も厳しい先
生の一人でもあります。

「しっかりなさい、王子」
私の方に向き直る母上。
「あのような商人風情に軽々しく言葉
をかけられ、侮られるなど……」
「厳しい視線に思わず目を伏せます。
「あなたはこの国の王位を継ぐ者なの

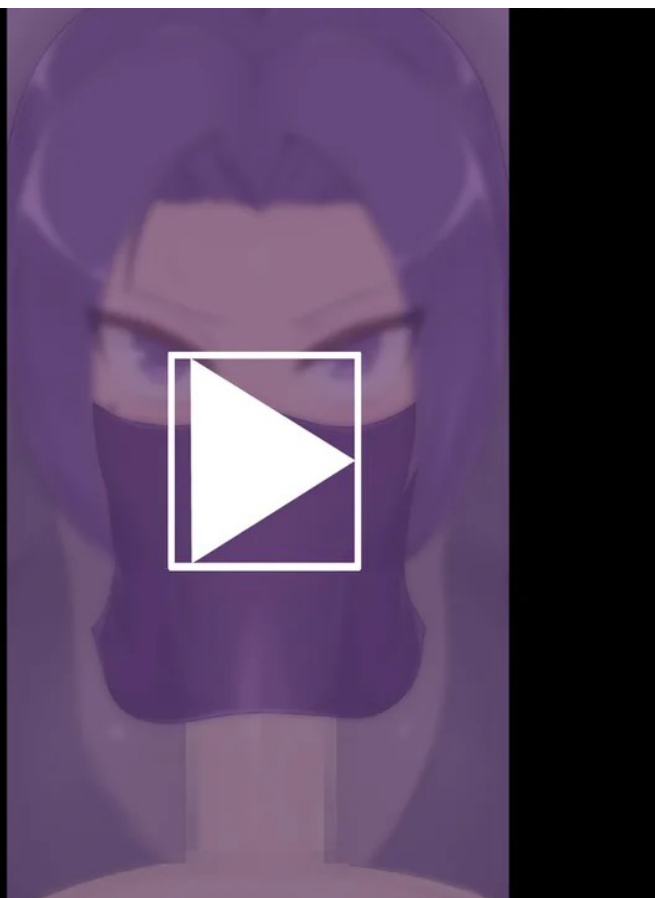
だから、もっと毅然とあしらわねば」
「も、申し訳ありません母上」
このように厳格な母上をしかし私は
深く尊敬していました。肩にかかる責
務を物ともしないその強さは私の密や
かな憧れと目標でもあったのです。





今日の授業は歴史。
母上自らが史書を携え、私の机の前に
立ちます。

賢母と名高い母上は非常に教育熱心で
あり、私の勉強を見ることは午前の重要
な日課でもありました。





落ち着いた声で淀みなく史書を読み上げていく母上。私も手元の紙にペンを走らせます。

「今日は非常に重要な我が国の歴史からいきましよう。この地方は元々七つの小王国が割拠しており……」



わざわざ我が屋敷までご足労いただき恐縮ですわ

覆面が邪魔やけどやんごとなきお方は照れ屋やさかいな



「この戦いの勝利によって、小王国連合は独立性を維持し……」

この講義の間に挟まれる質問に答えられないと、出来が悪いときなどは母上の持つ扇子で容赦なく手を打たれることす



おほ♥そうそう最愛の旦那のち●ぽや思てねつとりしやぶるんや

ほらもつとっしっかり吸い付かんかい！一期日がかかっているんやでえ



「この戦いの勝利によって、小王国連合は独立性を維持し……」

この講義の間に挟まれる質問に答えられないと、出来が悪いときなどは母上の持つ扇子で容赦なく手を打たれることす



おほ♥そうそう最愛の旦那のち●ぽや思てねつとりしやぶるんや

ほらもつとっしっかり吸い付かんかい！一期吸いかかっているんやでえ



「……また特に近年では、北方に魔族との戦線を抱える王国が、周辺国との融和政策に大きく舵を切り、小王国連合も我

が国を含め関係が大きく改善され……」
そう、だから私には成人したら王都の学校に留学したいという夢があった……。



ああっっ♥
もう辛抱たまらん
出すでっ!

商人風情のくっさい
ザーメンしっかり
受け止めえや



宮内の小聖堂から響いてきました。
「……今日はここまで」
母上がぱたりと史書を閉じます。

ただ、成人してすぐに王位を継いで欲しい母上は確実に難色を示すでしょう。と、そこで正午を知らせる鐘の音が王



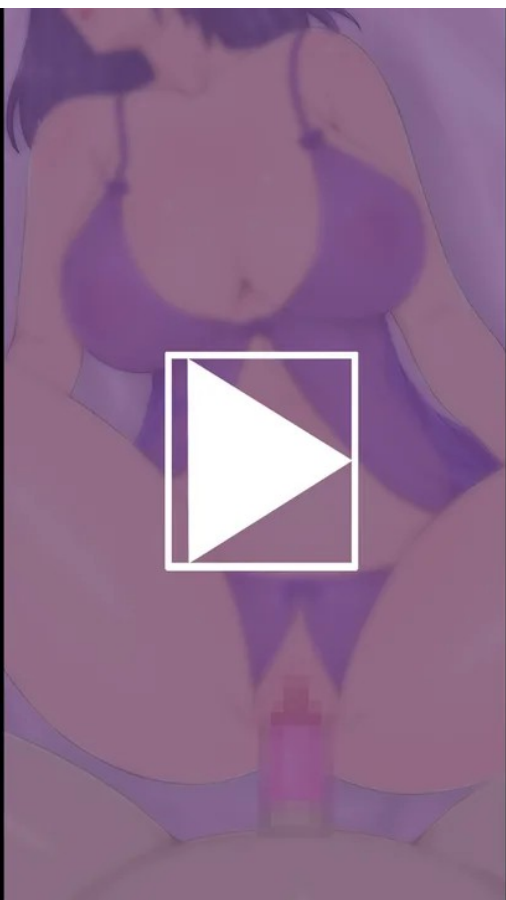
おくええ子やな
約束に色つけて
あと二週間待ったる

ふうっ♥おっ
そうや飲み干したら
ポーナス出そか



先日の授業内容を振り返りながら、
つもと変わらぬ様子で史書のページをめ
くる母上。

今日の授業はまた歴史です。
「前回はこちらまで進んでいましたね。
はそのまま、次のページの……」
で





関係も多く結ばれ、王族同士の血脈は密接に絡みあっているのです。そもそも私も……」

「我が国を含む小王国連合はいにしえより、戦乱の時代でも王族同士の交流が盛んであったようです。また政略的な婚姻



条件弾んだるのに…
勿体無いなあ

やっぱり生はあかんか
ほんま強情やで



そう、母上も隣国の王家からこの国に嫁いできたのです。古参の侍女によれば、当時からその美

貌は近隣に知れ渡っており、輿入れの行列を一目見ようと街道沿いは民衆でごったがえしていた程だとか。



ま、ええわ
しっかしまさか夢にまで見た体が目の前にあるとはなあ

今でも覚えてるわ
群集に混じって見た
あなたの姿を

玉座の間には何故かまた、トウフク殿が居ました。
「……今度は趣向を変えて……、この前で……」
玉座を見ながら、何やら小声で呟く彼に声をかけます。

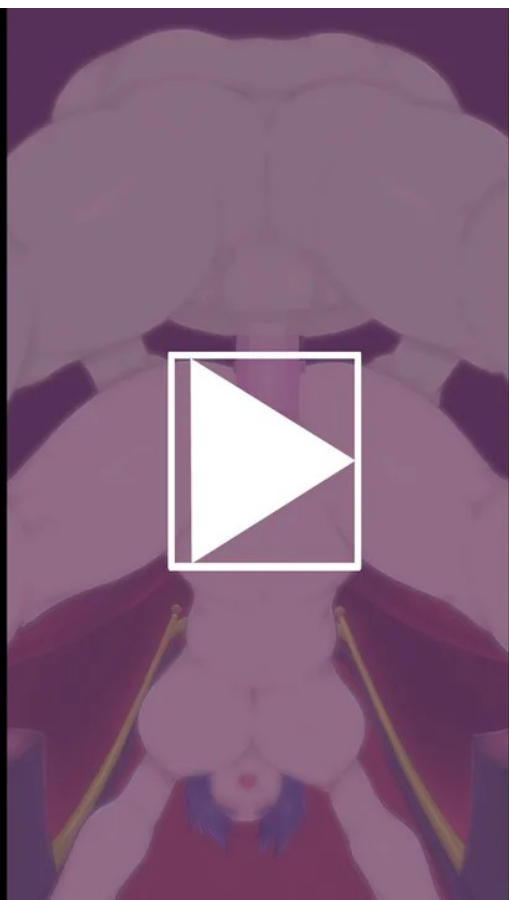


「おっと、驚かせんといってくださいよ王子殿下。いえいえ、用事と言う程でも。ではまた王妃様に叱られる前に退散させてもらいますわ」
怪訝な顔の私を尻目に彼はそそくさと帰っていききました。



今日は苦手な古典文学の授業。
退屈で難解な古の文字列は、眺めるだ
けで嫌になります。

古代王国で編纂されたという詩集の複
製本をゆっくと読み上げていく声に誘
われ、重くなってゆく私のまぶた。





それに今は……、まあいいでしょう」
少し苦い顔をしながら、それでも母上
は語り始めました。

これはまずいと、古参の侍女から聞いた話を少々唐突に母上に振ります。
「あの者は昔からお喋りが過ぎますね。」



「それ、こんな玉座の真ん前でヤルんや興奮するわなあ♥」

「おお？随分とすんなりワシのち●ぽ飲み込むやないか」



「しかし父上は周囲の反対を押し切って、
それで当時は騒がれたと」
「それはまあ、事実です」

「隣国での舞踏会の後、若き日の先王が
私に手紙をくださったのは本当です。し
かし、大恋愛の末などというのは……」



この王の間で初めて
拝謁の栄を賜わった時は
えらい感激したもんや

しっかりし
先王様にはほんま
お世話になりましたわ



家も次第にその熱量に折れる形で……
そしてその話が広まり、国中で騒がれたのだそうです。

「無愛想で氷の姫などと呼ばれていた私の何が良いのかあの人はしつこい位に手紙を送ってきて……。反対していた両王



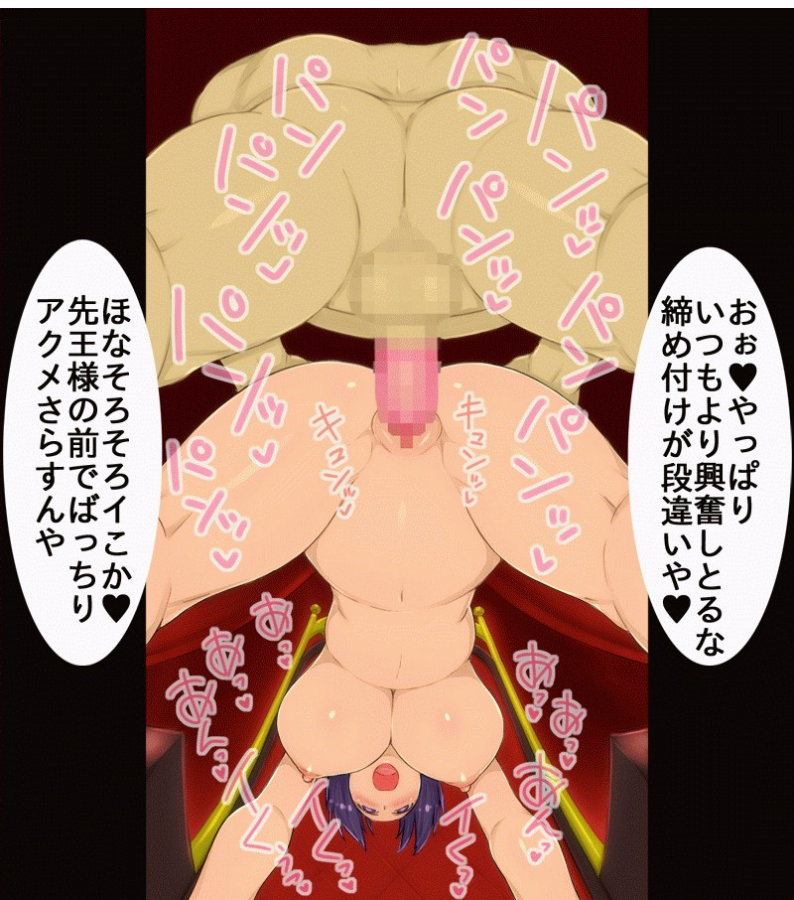
ほら王妃様
先王様の御影もばっちり
見守ってはるで♥

その恩返しを今
させてもらお思てね
こんな風に協力しとね
んですわ



も次第に静まっていったのだとか。「も、もちろんあの人には大変優しくして頂いて、その内に貴方を授かって……」

侍女の話によれば、長身で痩せ型の父上と並んで歩く母上の姿はまるで一枚の絵画のようで、当時批判的だった王宮内



ほなそろそろイこか♡
先王様の前でばっちり
アクメさらすんや

おお♡やっぱり
いつもより興奮しとるな
締め付けが段違いや♡



も次第に静まっていったのだとか。「も、もちろんあの人には大変優しくして頂いて、その内に貴方を授かって……」

侍女の話によれば、長身で痩せ型の父上と並んで歩く母上の姿はまるで一枚の絵画のようで、当時批判的だった王宮内



ほなそろそろイこか♡
先王様の前でばっちり
アクメさらすんや

おお♡やっぱり
いつもより興奮しとるな
締め付けが段違いや♡

…眠れないので私は、少し王宮内を散策する事にしました。薄暗い廊下を抜けた先には執務室から漏れる灯りが見えます。扉の隙間から覗き込むと、母上がまだ政務をしている様でした。

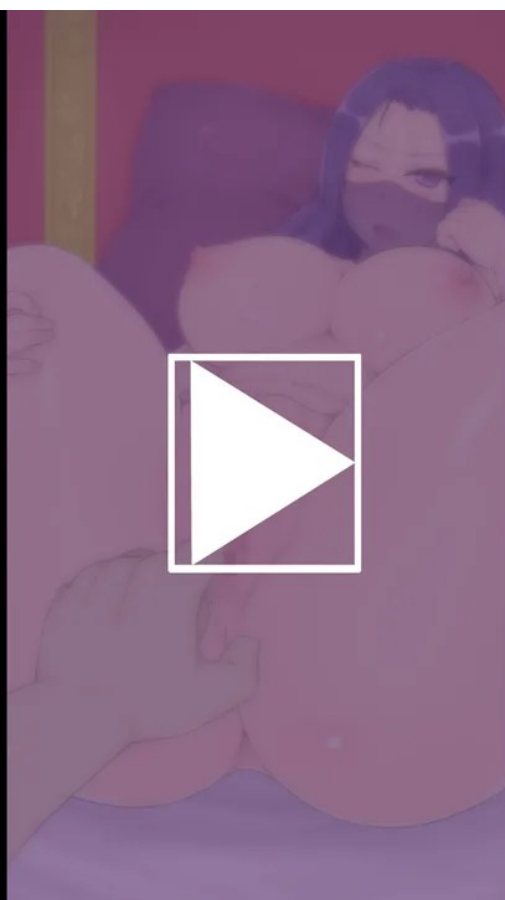


険しい表情で書類の束を睨む母上。眉間にしわを寄せ、時折ため息をついています。あのような姿は見た事がないありません。おそらくは財政状況に心を痛めているのでしょうか。私は声をかけられぬままその場を後にしました。



母上は公務でご多忙との事で、他の家庭教師も予定が付かず、本日は急遽自習となりました。

身が入らずに休憩していると、トウフク殿が廊下を歩いています。私は彼に尋ねてみる事にしました。





「のですか？母上も特にお忙しそうだし」
「ふむ、そうですねあ」
己の丸いあごを撫でるトウフク殿。

「おや王子殿下、奇遇ですな」
「トウフク殿、実は聞きたい事があつて
……。我が国の財政状況はそんなに悪い



ほんまの一発勝負
国を背負った賭けや

さあ今からひとつ
余興といこか
負ければオシオキ
勝てば借金全てチャラ



す。ですがこのトウフクも王家に恩のあ
る身にて、支援を惜しまぬつもりで
「そうですか、返済が……」

「歴代の王が残された負債がやはりあり
ましてな。ワシの商会への支払いも少々
滞っている所があるのは事実でございま



もつともほら
はやくも糸引いて
しもてるけどね♥



借りたもん返さへん
この強欲なま●こが
はたしてお行儀良
我慢できるのか



「は、はい……」
「真摯にご協力くださる王妃様には本当に頭の下がる思いですわ、ぐふふ」

「勿論王妃様の厳格なるご指導の下、財務状況の改善にも一致団結して盛り立てていく所存ですので」



しかし困るなあ
いきなりこれじゃあ
勝負になるんか？

では早速中にお邪魔しまひよから
おっ？ええ反応や♡



「ほう留学ですか。見識を広めるのは大変結構な事で」
 「ただ母上には反対されるだろうし」

「やはり留学など無理な話なのかも知れませんがね」
 ついぼつりと漏らしてしまいました。



もうビッシヨビッシヨや
 自分から尻浮かせて
 おねだりしとるわ♥

おいおいちよっと
 掻きまぜただけ
 すぐこれやで



をドンと叩いて言いました。
「不肖このトウフク、また何かご相談が
あればなんなりとお答えしますぞ」

「ほほ、大事な一粒種。手元に置いてお
きたい言うのも親心ですな」
しきりにうなずくと、トウフク殿は胸

いや〜ほんまこの
年増ま●こは貞淑さの
カケラもないなあ♥



見てみいこの染みて
だらしなく潮吹いて
垂れ流しとるわ



「今日は一体どうしたのです？先程から授業にまったく集中出来ていないではありませんか」

険しい顔で私を咎める母上。私は観念して留学の事を母上に話してみる事にしました。





「成人の儀よりさらに数年、王位継承を
遅らせるなど話になりません」
「で、ですが……」

「それはなりません」
私の言葉を予想通り、いえそれ以上に
ばっさりと母上は切り捨てます。



先日の勝負に負けた
お仕置きを受けねば
なりません……

：わたくし
王妃ベアトリーチェは
只今より



私が口を挟むまもなく、母上は理路整然と反対理由を並べていきます。「……………」

「貴方は先王の唯一の嫡子。なにかあれば我が王家の断絶を招きましょう。それに……………」



トウフク様にせつかくのチャンスを与えられながら

わたくしのはしたないおま●こは…あんっ♡♡♡簡単に負けてしまい…♡



母上の言葉はもはや止まらず、私は昔、累代の甲冑を倒してしまった時の様に黙っているしか出来ませんでした。

「……貴方はもっと誇り高き王家の血脈たる自覚を持って、先王様の様に立派な振舞いをしなくては……」



その罰として今
生ち●ぽガチハメ
種付けセッククスで

トロトロの危険日
生ま●こを味わって
いただいてえっ♡



「為す、それが即ち王の為政……、ふう」
俯く私に気付いたのか母上は少し表情
を緩めました。

「いいですか、貴方に課せられた王族の
責務を今一度考え、国民のよき手本とな
るように。天に恥じる事なきおこないを



王家の負債を返済する
までっ♡わたくしは
トウフク様のお♡

肉穴奴隷としてっ♡
精一杯ご奉仕しなくては
ならないのですうっ♡



「為す、それが即ち王の為政……、ふう」
俯く私に気付いたのか母上は少し表情
を緩めました。

「いいですか、貴方に課せられた王族の
責務を今一度考え、国民のよき手本とな
るように。天に恥じる事なきおこないを



肉穴奴隷としてっ♡
精一杯ご奉仕しなくては
ならないのですうっ♡

王家の負債を返済する
までっ♡わたくしは
トウフク様のお♡



「は、はい……。私が間違っていました。わがままを言っでごめんなさい……」
王都に行く夢は儚く消えた様でした。

「それに例の、貴方のお妃候補の話も少しずつ進んでおります。相手の姫君を何年も待たせる訳にはいかないでしょう？」



ごめんなさい王子
貴方に弟が出来ちゃう
かもしれない♡

あぁっ♡王族の
高貴なる子宮に平民の
子種汁流れ込んで！♡

「おお……。留学の話お聞きしました
で。残念なことですな」
「いえ、やはり只のわがままで……」
「ふむ、どうですやろ。気晴らしにワ
シの別荘にお越し頂くというのは」
留学を反対されて落ち込む私を励ま



そうとしてくれているのでしょうか。
「しかしそれは……」
「いやいや、これも見識を広めるため。
そう、留学の代わりですわ」
トウフク殿は声を潜め、私に丸い顔
を近づけます。

「それに王子、ワシが厳選したメイドも沢山おるさかい、選り取り見取りでつせ。気に入った子は夜伽にでも」
「そ、そのような事私にはまだ……」
「なあに、軽い息抜きですわ。王族なら誰もが通る道です」



……これは危険な誘いだと頭では理解していても、私の言い訳は言葉巧みに剥がされていきます。
「王妃様には内緒にしとくさかい……」
その言葉は不思議と私を楽にしついに首を縦に振ってしまったのです……」

く王妃編完く

A throne is centered in a dark room, framed by heavy red curtains. The throne is ornate with gold and red accents. The floor is covered in a red carpet with yellow stripes. The text '第二章 神官編' is overlaid in the center in a pink, stylized font.

第二章
神官編

王宮内の一室で、俺は小説のページをめぐりながら時間を潰していた。何故なら今日の分の仕事は既に片付けてしまったから。いや、別に俺が優秀とかではない。地方の士官学校からなんとかここの



王宮に就職できたのだが、配属された部署がこの暇な文献管理室だったというオチだ。少々退屈な事に目をつむればまあ、本好きの自分にとっては居心地の良い職場と言えるだろう。

「いや、ヒマっすね、先輩」
ダルそうな口調で話しかけてきたのは後輩のリヒト。
貴族の三男だか四男だかで、コネでここに入ったらしい。跡を継ぐ可能性が薄い貴族の子弟の定番コースだ。



「なんだ、お前も終わったのか」
ちなみにこの部署には俺とこいつしか居ない。
俺とは育ちから何から違うのだが、意外とウマが合った。
まあ悪い奴ではなさそうではある。

只年齢イコール彼女いない暦の俺と
違ってこいつはそこらへん派手らしい。
いわゆるチャラ男ってやつだ。貴族
だから社交的でモテるのか？
「あれこの文献、っていうか小説か？
違うとこのですよ。これ間違ってるウチ



に来てますね」
「どこのだ？」
「聖堂の神官室ですね。あそこ可愛い
子多いんですよ。でも自分ちよつと……」
「仕方ないなあ、俺いつてくるわ！」
簡単な手に乗せられる俺……。

「すいませーん、文管室でーす」
少しためらいながら聖堂に入ると、
処女懐胎の逸話を持つ聖母像が壇上か
ら見下ろしてきた。
「は〜い。何か御用でしょうか？」
白を貴重とした神官服に身を包んだ



女の子が物腰柔らかに対応してくれる。
(か、可愛い……)
「あっああ、あのおっ！ま間違ってこ
っちにこの本が来ちゃったみたいでっ」
思わず緊張してどもる俺。
「あら、私が頼んだ本」

「そ、それって砂球物語の新刊？」
「はい。え、知ってるんですか？ 私このシリーズ大好きで、だから城下町の本屋さんにもいつも頼んでたんですけど中々届かなくて。でも嬉しい。私周りに同じ趣味の人居ないんですよ」

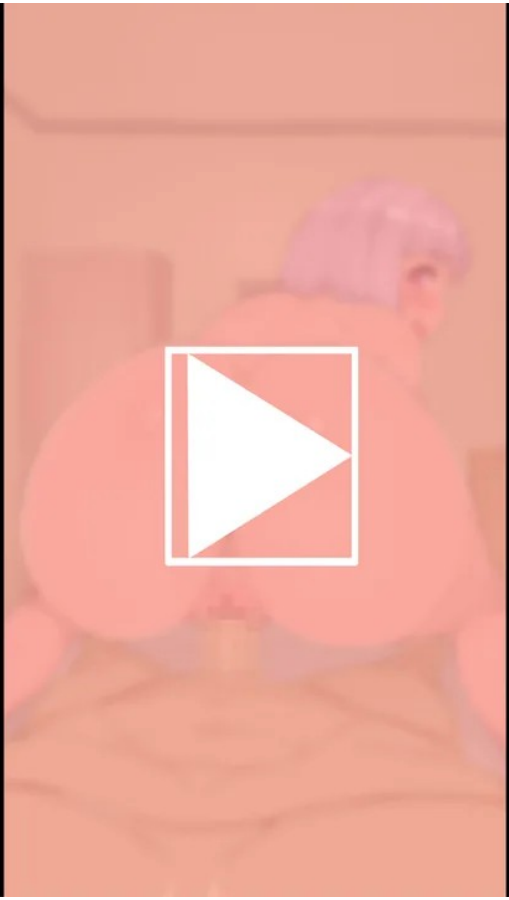


この本に心から感謝である。
「私のフロリーカっています。良かったら時々聖堂にも寄って下さいね」
本を大事そうに抱えてはにかむ彼女。
……本当にあるんだな、運命の出会いって。



それから俺は、この小さな王宮内の聖堂にちよくちよく足を運ぶようになった。目的を察した後輩のニヤケ面にも気付

かない体で、今日も昼休みに文管室から抜け出す。なぜなら彼女はこの時間、かならず聖堂にいるからだ（俺調べ）。





エックしてたから
彼女とは不思議とジャンルや好きな作
者も合うみたいだった。

「え、すごい。あのシリーズもご存知な
んですか？」
「まあね。俺、売れる前からあの作者チ

え？
つけなくていいよ
私生好きだもん♡



ほくら♡
おち●ぽパクっ♡



す。少し暗い感じで
『分かる』者同士の会話がうれしくて、
おおげさに相槌をうつ。

「売れる前に短編集なんかも結構だして
るよね」
「はい、私は初期の作品も大好きなんで



それに大好きな
リツ君のち●ぽ
直接感じたいの♡

大丈夫だよ
今日は安全な
日だから♡



る球技を題材にしたスポーツもので、士官学校の部活動をメインに描いている人氣作品だ。

「そういえばこの前の最新刊はどうだった？砂球物語の。俺も昨日読んでさ」
件の砂球物語とは、南方で流行っ

ふふっリッ君ったら
そんな顔しちゃって
かわいい♡



は〜い♡私の
生おま○こでシコ
♡♡シコ♡♡



アツいですよね！それにあの人が怪我しちゃって……。やだ、もうこんな時間！」
壁の魔力時計を見上げて慌てる彼女。

この作品がヒットした影響で、砂球を始める人が急増しているのだとか。
「新しくライバル校が登場して、展開も



いつも負けちゃう
生意気ち●ぽにお仕置き
しちゃうぞ♡

うりうり♡
リッ君の大好きな
高速生ま●こキだ♡



アツいですよね！それにあの人が怪我しちゃって……。やだ、もうこんな時間！」
壁の魔力時計を見上げて慌てる彼女。

この作品がヒットした影響で、砂球を始める人が急増しているのだとか。
「新しくライバル校が登場して、展開も



いつも負けちゃう
生意気ち●ぽにお仕置き
しちゃうぞ♡

うりうり♡
リッ君の大好きな
高速生ま●こキだ♡



そう言ってパタパタと去って行く彼女。あれはもう聖母様の生まれ変わりだろと、俺は聖母像を見上げながら呟いた。

「お昼休み終わりの鐘を鳴らさなきや。うふふ、あなたとお話しているとすぐに時間が経ってしまいますね」



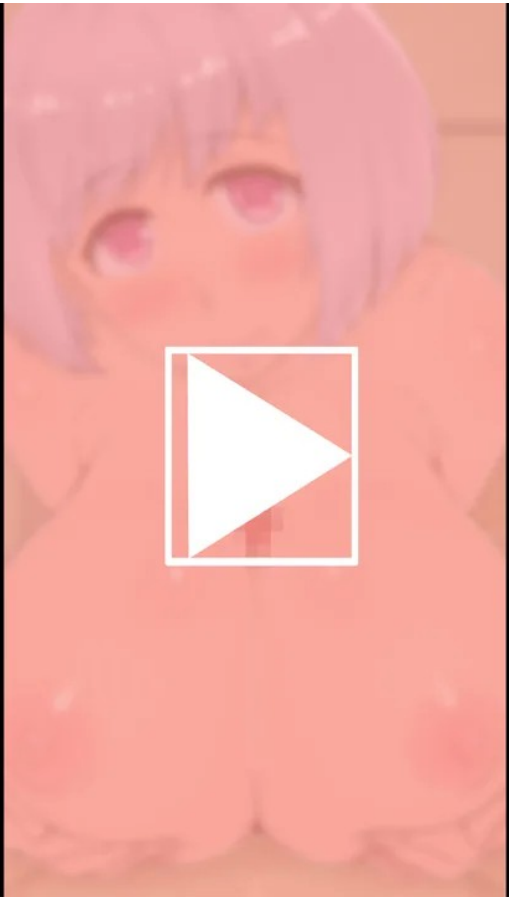
んっ♡おち●ちんが私の中でびくびくしてるね♡

あっやだっ♡あんっ♡もう…また私がイカされちゃった♡



今日も王宮内の食堂で手早く日替わり
定食を胃の中にかきこむと、優雅にデザ
ートを注文する甘党の後輩を置いて俺は

聖堂へと足を運ぶ。扉を開けると彼女は、
聖堂内に差し込む光よりも眩しい笑顔で
俺を迎えてくれた。





俺の苦しい言い訳にも彼女は笑って相槌をうってくれた。
「ふふっ、そうなんですか？」

「こんにちは、最近よくお会いしますね」
「いやあ、ちよつと食後の散歩の休憩にね、あはは。最近太っちゃって」

はいっ♡
これでいい？



え？
今日は胸で〜？
ふふ♡仕方ないなあ



確かにこんなに大きいと目立つもんなん？でも俺には普通に話しかけてくれるけど……。

「昔からこれだからかわれる事も多くて。だから男の人が少し苦手だったんです。でも今は少し自信も出来て……。」



じゃあいっぱい気持ち良くしてあげちゃうね♡

そ、そう大好きなんだ♡



確かにこんなに大きいと目立つもんなん？でも俺には普通に話しかけてくれるけど……。

「昔からこれだからかわれる事も多くて。だから男の人が少し苦手だったんです。でも今は少し自信も出来て……。」



じゃあいいっばい
気持ち良くして
あげちゃうね♡

そ、そう
大好きなんだ
うふふ♡



そ、そんなに俺との会話が楽しいって事？これはもうフラグが立ってるんじゃないか……？

「それに私、少し前までかなり落ち込んでたんです……。でもこうやって話したら大分楽になっちゃいました」



おっぱいの中でピュッピュッしてる♡♡

あゝっ♡♡
リツ君もう
イっちゃったのお？



の懺悔になりますけど、うふふっ」
そういつて悪戯っぽく笑う彼女に、俺
は完全に心を奪われていた。

「そうだわ、もし何かお困り事とかご相
談があれば、また今度私がお聞きします
よ？懺悔室がないので、聖母様の御前で



もうそんなに
気持ちよかったの？
ふふっ嬉しいけど♡

ほら見てえ
リッ君胸だと
すぐ出しちゃう♡

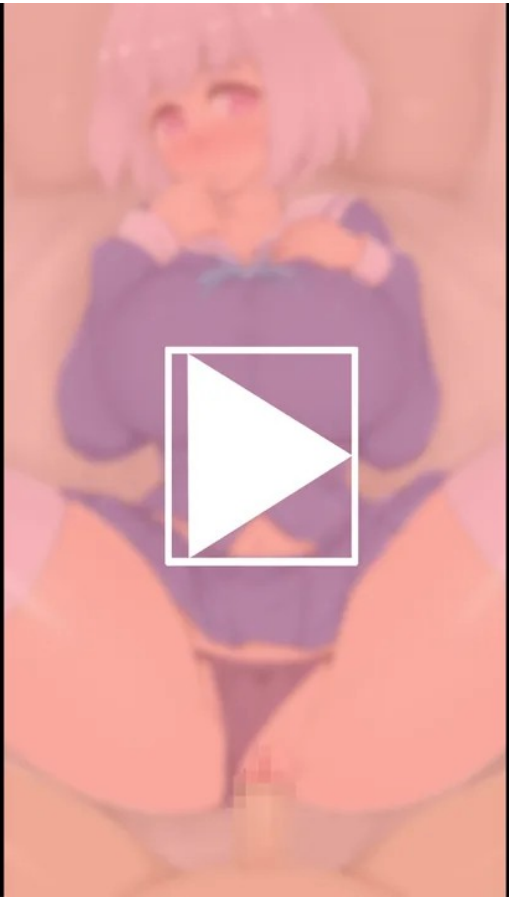
くすっ♡

ドロ...
アキアア...



興味津々の後輩に色々と聞かれたが、当然フーリカちゃんの事は教えない。彼女はお前みたいなチャライ人種と関

わっていい子じゃないのだ。適当にはぐらかしつつ、今日も俺は心のオアシスへと向かうのだった。





「へえ、すご。有名なとこだ」
 「神官科を出てすぐ、この地方の聖母教会に所属して、そこからの派遣ですね」

「そういえばフローリカちゃんはどこ卒業なの？」
 「え、私ですか？聖ベロニカ付属です」



「どうかな…
 似合ってる？
 あ、ありがとう」

「リッ君があんなに頼むから久しぶりに着てみちやっただ」

「ユザン」
 「ムル」
 「ニエアアア」



話す事はなかったですね
 これは全然あるだろ……。いや、俺も
 童貞だし、お互い初めて同士みたいなの？

「神官科って女子が多いって聞いたけど」
 「そうですね、ほぼ女子校みたいでした」
 男子は別クラスで分かれてて、ほとんど



私の初めては
 全部リッ君に
 あげちゃった♡

うん、今まで
 付き合った事なくて
 そう、学校でも

あ、んんん
 びくっ
 ズルズル



「あく、じゃガラの街とかわかる？」
「はい、その近くの村に住んでました」
「えっ、ほんと？俺もその近く」

「こほんと咳払いで一旦邪念を払う俺。
「じゃ、じゃあ出身はどの辺なの？」
「ブール・デナ地方の田舎の方です」



「あっやだっ
どうしたの
急にそんなっ」

「だから私の体は
ぜくンぶりッ君だけ
のモノだよ」



珍しい屋台も多くて周りの村から人が押し寄せるんだよね
「私、あの飴細工の屋台が好きで……」

「あら、奇遇ですね。ガラのお祭りとか行かれてました？」
「行ってた行ってた！いや〜懐かしいな。」



もつと乱暴に突いてっ♡
おま●こメチャクチャに
してえっ♡

今日のリッ君
でもそれより好きいっ♡



すれ違ってたかも知れませんが
別れ際の彼女の言葉に心が跳ねる。
これも赤い糸で結ばれてない？

ひとしきり盛り上がった地元話は一層
彼女を身近に感じさせた。
「ふふ、ひよっとしたら私達、その時に



え？うん…仕方ないなあ
また今度着てあげるね♡

あつ制服に
かけてる？も…こんなに
汚しちゃってえ♡

「つーか、もうイケるっしょ」
「へ？」

後輩に思わず聞き返す俺。

「いやだってそこまで話も趣味も合うなら告ってつきあえばよくないスか？」
「仕事中にとんでもない事を言い出し



やがって。暇か。

「なんか俺に名前教えてくれないスけど、その子神官なんでしょ？」

「まあ、な」

「ゆーてあいつら結構簡単にヤれますよ。俺も少し前に……」

「いや彼女はそんなんじゃないよ」
こいつみたいなのがチャラい男に股を開くようなビッチでは断じてない。
だがリヒトの言う事にも一理あるかもしれない。
正直手応えはあるというか、もう好

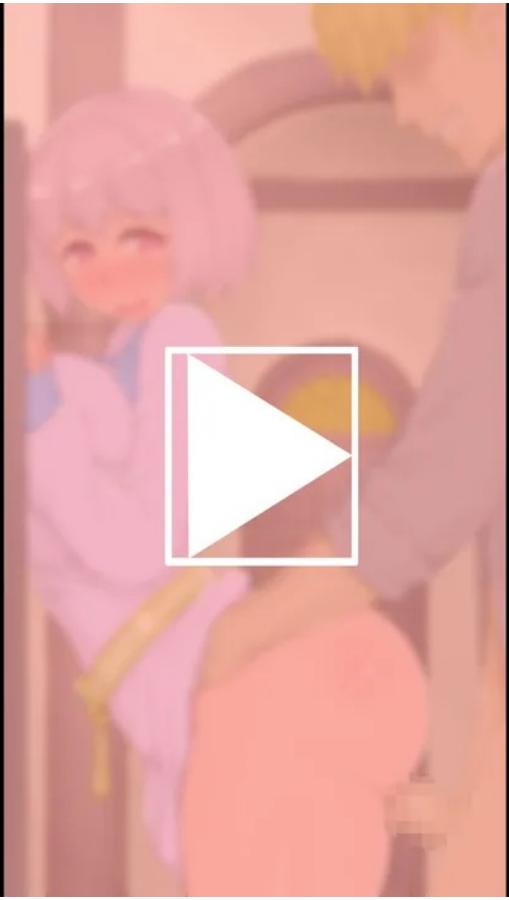


感度はかなり高いはず。むしろもう両
思いといても過言ではない気がする。
確かにこの状況、あとは俺が勇気を
出すだけじゃないか？
……っし。ここはもう、いっちやいま
すか！



聖堂の扉の前で、幾度か深呼吸を繰り返す。鼓動はまるで早鐘の様だ。

落ち着け、俺……。昨夜必死で考えた告白を頭の中で反芻しつつ、扉を開け彼女の前に立つ。





「ダメですよ、ちゃんと食べないと。ひよっとしてダイエツトですか？」
俺の体を心配してくれてる。優しい。

「あら、今日は少し早いですね。お昼はもう済ませたんですか」
「今日は食欲なくて……」



我慢できないって…
もし誰かが来たら

え？ここでするの？
うん、でもお…

ああんっ♡
ドキッ♡
ブチユロ♡
キザッ♡



ど、そいつに気になる人がいて。で、話している内にどんどん好きに……」
「なるほど、好意を持ってしまったと」

「じ、実は今日話があって」
「あら、何かお悩みのご相談ですか？」
「その……、あくまで友達の話なんだけ」



待って……あっ♡
いきなり奥につ♡♡

それにこんな聖母様の
前で……見られてるみたい



心なしか食い気味に答える彼女。
「えっ……、あ、あーっ、違う違うっ！
これ友達の話でえっ。やっ、やだなあ〜」

「ごめんなさい、私は聖母様にその身を
捧げた敬虔なる信仰の使徒。そういうお
話をお受けする訳にはいかないのです」



おち●ぽ大好き女です♥
乱暴におま●こ突かれるのが
一番好きですうっ♥

聖母様申し訳ありません
私、神官フローリカは
只の淫乱な



「えっ……、あ、あーっ、違う違うっ！
これ友達の話でえっ。やっ、やだなあ〜」

「ごめんなさい、私は聖母様にその身を
捧げた敬虔なる信仰の使徒。そういうお
話をお受けする訳にはいかないのです」



「おち●ぽ大好き女です♥
乱暴におま●こ突かれるのが
一番好きですうっ♥」

「聖母様申し訳ありません
私、神官フローリカは
只の淫乱な」



みたいで、はは……。あつ！ちよっと
急用を思い出した。じゃ、じゃあまたつ」
俺は小走りで聖堂を後にした。

「あつ、すいません。私ったらつい勘違
いしちゃったみたいで。恥ずかしい」
「とと友達がこんな風に告白しちゃった



分からない感覚かな
でも私も赤ちゃん
出来ちゃうかも♡

ああん♡中にいっぱい
びゅんびゅんして
うぶん、聖母様には♡

「でその前の女が……理がこないって
言い出し……ぜったい産むとか……正
直ウザく……結局勘違いで……」
リヒトの元カノ話が続いている。
……あれから聖堂には行っていない。
「先輩元氣ないツスね。やっぱ振られ



「たのマジなんスか」

「……」
「聖堂にいる子で先輩みたいなのが好
きそうなタイプって、たぶんフロリー
カあたりでしょ？」
「うぐっ……」

「さっきの話、その子ですよ」
「え？彼女、お前の元カノ……？」
「結構チヨロくてすぐヤレましたけどね。俺が初めての彼氏らしくてメチャヤ
尽くしてくれたし」
「へ、へえ……」



「まあでもあいつ面食いって言った
からな」
「……たしかに、俺の学生時代のあだ名
は眼鏡オークだけでも」
「体は最高だったな。性欲も強くて」
「う、うそつけ」

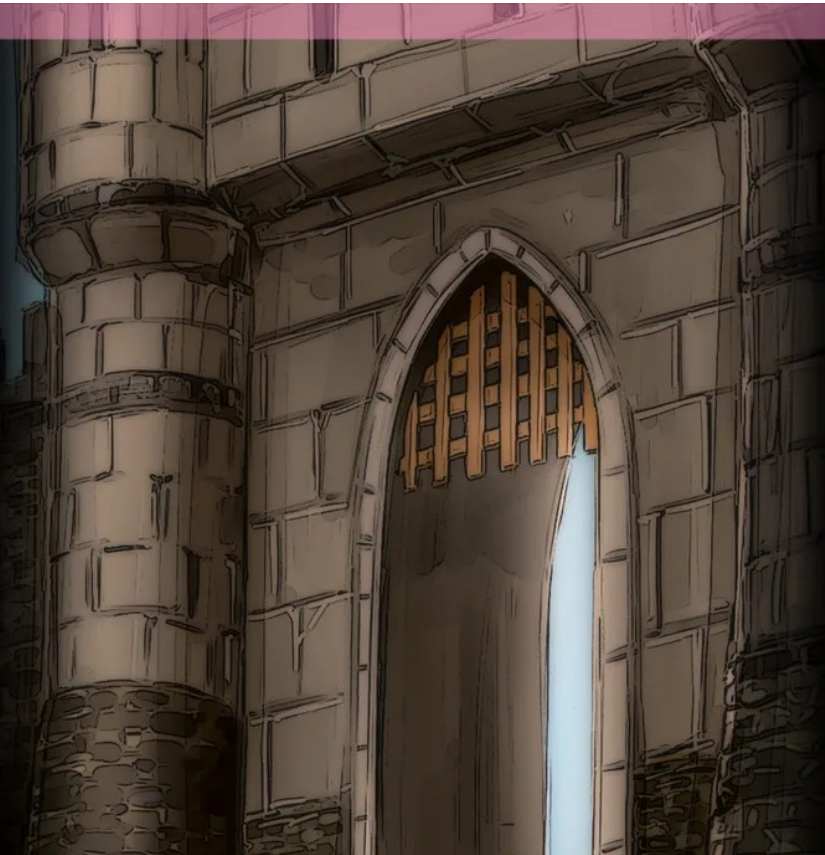
「いやマジですって。ハメ撮りも結構残ってますもん。そうだ、俺今月割りと金欠なんで、なんか飯奢ってくれたら動画全部送りますよ」
はあぁと俺は大きく溜息を吐く。
舐められたもんだ。所詮人生イージー



モードの貴族のお坊ちゃん。人の心などわからないのだろう。俺は鼻で嗤って奴にびしつと言っちゃったよ。
「金の豚亭スペシャルランチに日替わりデザート食べ放題券十枚つけます」
く神官編完く

A central image of a throne in a dark room. The throne is red with gold trim and is set on a red carpet. Red curtains are pulled back behind the throne. The text '第三章 騎士編' is overlaid on the throne in a pink color.

第三章
騎士編



乾いた唇を舐めてうるおした。
うう、緊張する……。
この騎士団に入団して今日が初出勤。
僕が配属されたのはこのやや陰鬱な
北門の守備隊だ。もちろん花形部署と
は言いがたいだろう。

でも人気のある儀仗隊や近衛騎士な
んかは、当然貴族閥で占められている
と聞く。平民出身の僕が騎士になれる
のも小さいとはいえなんとか王国騎士
団に入れたのも、王立卒という肩書き
のおかげなのである。

「何難しい顔してんの、あんた。お腹でも痛いのか？」
同期のリーシャが話しかけてきた。
同じ村出身の幼なじみでいわゆる腐れ縁というやつだ。裕福な商家の末っ子なので甘やかされて育った。そのせ



いで同い年の僕は昔から手下扱い。今まで散々振り回されてきた。
「今日からあたしと同じ騎士団で働くんだから、もっと喜びなさいよね」
はあ、やれやれ。僕の進路先を強引に書き変えさせたくせに……。

「うゝす。揃ってんなあ、新入り共」
隊長が来られた様だ。僕とリーシャ
は整列し背筋を伸ばす。
「俺あ北門守備隊隊長のボーマンだ」
ボーマン隊長の目が僕に向く。
「なんだあ、随分とヒョロいな新人。」


そんなんで騎士が務まると思ってるの
か？近頃の若い奴は根性ねえからなあ」
「そういって隊長は僕的首根っこを掴
み酒臭い息を吹きかけてきた。
驚いて何も言えない僕。
「やめて下さい」



リーシャが毅然と割って入る。
「冗談が過ぎますよ。酔ってるんですか隊長？」
「おお？いいね、生意気だね」
無精ひげのちらばるあごを撫でながら隊長が口をゆがめる。



「まあとにかくこの財政難の折、我が隊も少数精鋭、一騎当千。兵士共に舐められんように気張ってけよお前ら」
隊長は僕達に指示だけ出すと詰所へと戻っていく。そうして不安を残しながら、一日目は過ぎていった。



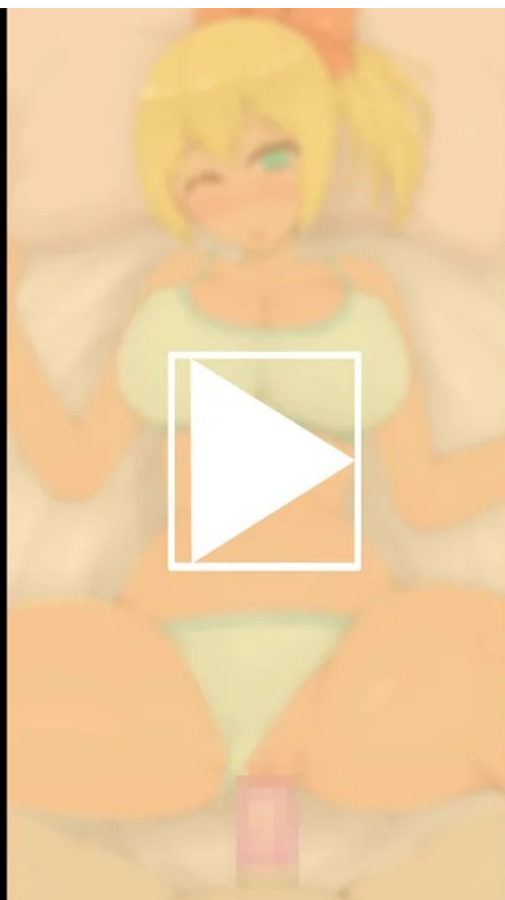
数日後、城門の側にある詰所で隊長が歓迎会を開いてくれたのだが……。
「なんだあもう終わりかあ？口ほどにもねえなあ〜」
「ま、まだ余裕ですけど」
早々にダウンした僕の視界の端で、

リーシャはがばがばと杯を重ねているようだった。
それを尻目に僕はふらふらと外に出て堀に胃の中の物を吐き出した後、隣の騎士団寮にある自分の部屋に戻りそのままベッドに倒れこんだ……。



隊長が来ないので朝礼もなく、兵士達は配置当番表に従って思い思いに散っていく。

門の前に残ったのは僕とリーシャの二人だけ。そうだ、僕が帰った後の事も聞いてみるか。





飲んで解散って感じ。うん、あんたが帰った後すぐ終わったし。しっかしあんた、相変わらず弱いんだね」

「なあリーシャ、昨日はあの後どうだった？ 僕すぐに気持ち悪くなっちゃってさ」「えっ、べ、別に普通だけど。しばらく



あ…れ…？

お？ おうきっついいねこの感触は

まさかま●こも新人かあ？



……村の祝宴で僕は盛大に吐いたあげくこいつに介抱されてその後散々冷やかさたんだ。思い出したくない僕の黒歴史だ。

リーシャがクスツと笑う。「士官学校の飲み会でもそうだし、それに村の成人式の時だって……」



えっ？嘘……これ……隊長……いや……

お、目が覚めたか？大人しくしろよ……ってまあ動けねえか

俺の特製ブレンドを無警戒にグイグイ空けたからなあ

ん……ん……
ビク……
ブ……
ブ……



「リーシャに頭が上がらないのだ。少し話題を変えないと。」
「そういえば隊長は？」

「い、いいよその話は」
慌ててリーシャの話をさえぎる。
こういう類の話が沢山あるから、僕は



「やめて…
な、何を…？」

「何って歓迎会で
潰れた新人を介抱して
やっつんだよ」

「上司として当然だろお
ほらもつと楽に楽に♥」



それはリーシャも同じなのか、顔が赤い気がする。
「ねえ、あのさ、あ、あたし昨日……」

「さあ？飲みすぎて二日酔いで寝込んでるんじゃないの？」
なるほど、そうかも知れない。



あつ……♡
ちよ……だめえっ♡

おいどうした新人
我慢しなくていいぞ

俺のが気に入ったか？
お前のま●こが初めて
啜えたち●ぼだ♡



それはリーシャも同じなのか、顔が赤い気がする。
「ねえ、あのさ、あ、あたし昨日……」

「さあ？飲みすぎて二日酔いで寝込んでるんじゃないの？」
なるほど、そうかも知れない。



あつ……♡
ちよ……だめえつ♡

おいどうした新人
我慢しなくていいぞ

俺のが気に入ったか？
お前のま●こが初めて
啜えたち●ぼだ♡



「剣技の自主練しようよ。ストレス発散だ」
「僕を背中をバシッと叩くリーシャ。
……何を言いかけたんだろう。」

「え、なに？聞こえなかった」
「……ううん。なんでもないっ。そうだ、
午後の空き時間にさ、練兵場であたしと



「お前みたいな手間のかかる
部下とはもつと親睦を
深めんといかなあ♡」

「あ……あ……♡
いや……こんな
隊長なんか……」

「ふう……♡
性格もま●こも
生意気な奴だ」

「ふいっ。今日も終わるか」
開放感から大きく伸びをする。
「あ、あたしちよつと呼ばれるから」
「また？さてはなんかやったな？」
「バカ、違うわよ。只の連絡」
僕の鼻を指ではじくと、リーシャは



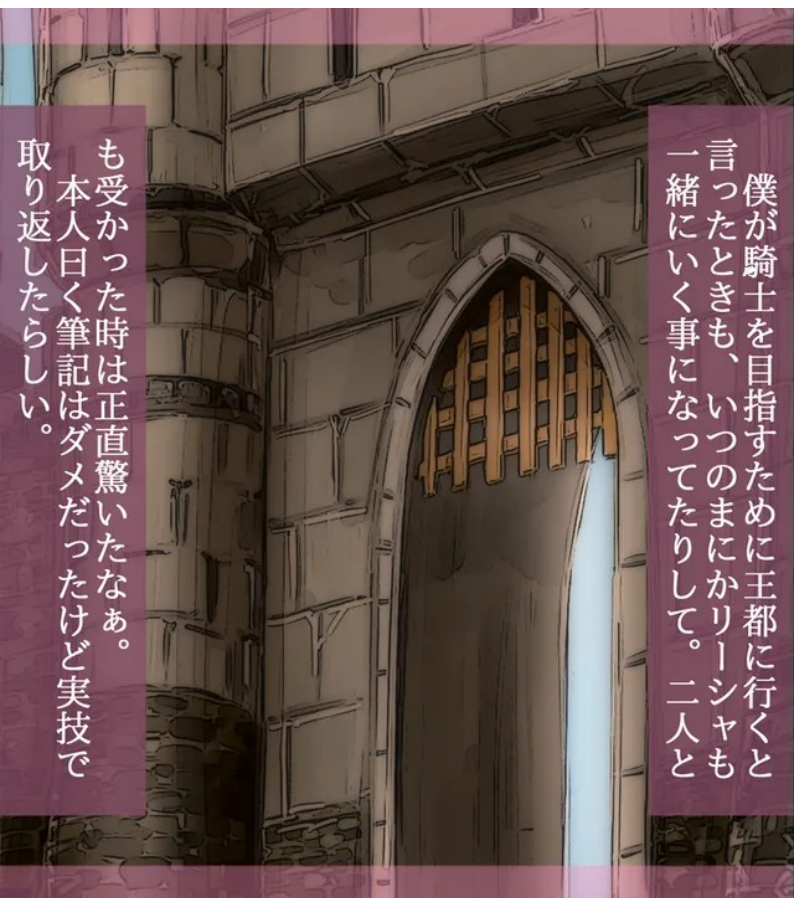
詰所へと歩いていった。
ちなみに隊長の部屋は詰所の二階に
あり、隣の僕達の寮とは違って少し豪
華な部屋があてがわれているらしい。
そこにリーシャは何度か呼び出され
ている様だった。



小さい頃から幾度となく、まだ寝ている僕のベッドから強引に毛布を引っぺがされたものだ。

今門前には僕一人しかない。隊長は非番。リーシヤは遅刻……だろうか？あいつが寝坊とは珍しい。





僕が騎士を目指すために王都に行くと言ったときも、いつのまにかリーシャも一緒にいく事になってたりして。二人と

も受かった時は正直驚いたなあ。本人曰く筆記はダメだったけど実技で取り返したらしい。



明日は非番だから朝までじつくり可愛がってやる

あたしは朝番ですけど…

構わねえよ遅れてもどうせヒョロ男は何も言わんだろ

それにここ数日で
気付いただろ？
体の相性が良いことに

そんなこと…
あたりには
わかりません

まあ、俺しか男知らん
か…しかしあいつも
残念だったなあ

卒業後の進路だって、まさか同じ騎士
団になるなんて。まあ、あいつに言われ
て変えたんだけど。故郷の村も近いし。

その時も周りから散々冷やかされたな。
あいつは一体、僕の事をどう思ってい
るんだろう……。



人が立っていた。
「まったく、隊長には黙っとくけど、バ
レたら大変だぞ」

「ごめん、遅れちゃった……」
「うわあつ、なんだリーシャか」
思い悩む僕の隣にいつの間にか当の本



それが今じゃ
すっかり俺専用ま●こ
ってワケだ♥

ヒョロ男に捧げようと
健気に守ってたんだ
よなあ？

っ…それは
だ…アイツの
アイツの事が…



心なしか顔も赤いし、表情もポーっとしてる感じだ。
「ううん、大丈夫だよ」

「う、うん」
「一体どうしたんだよ、体調でも悪いのか？」



こんな風に弱点をじっくり責めてやると…

それにほら
お前の好きな所も
大分わかかってきたぜ

あっ♡いやっ♡
ここダメえっ♡♡



心なしか顔も赤いし、表情もポーっとしてる感じだ。
「ううん、大丈夫だよ」

「う、うん」
「一体どうしたんだよ、体調でも悪いのか？」



こんな風に弱点をじっくり責めてやると...

それにほら
お前の好きな所も
大分わかかってきたぜ

あっ♡いやっ
そこダメえっ♡♡



人じゃないっていうか……
そうかなあ……と、釈然としない表情を
浮かべてしまう僕だった。

「ひょっとして昨日ほんとに隊長に何か
嫌な事言われたとか？」
「違うって。それに隊長もそんなに悪い



まだ始まったばかりだ
このまま朝までじっくりお前の
体に男の味を教えてやるよ

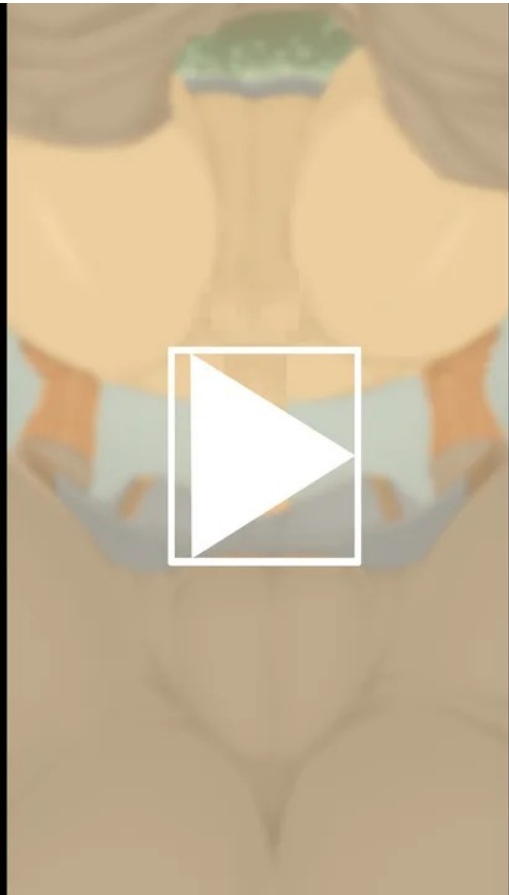
おほく良い締めり♥
ほらもつと足を絡める
そう良い子だ

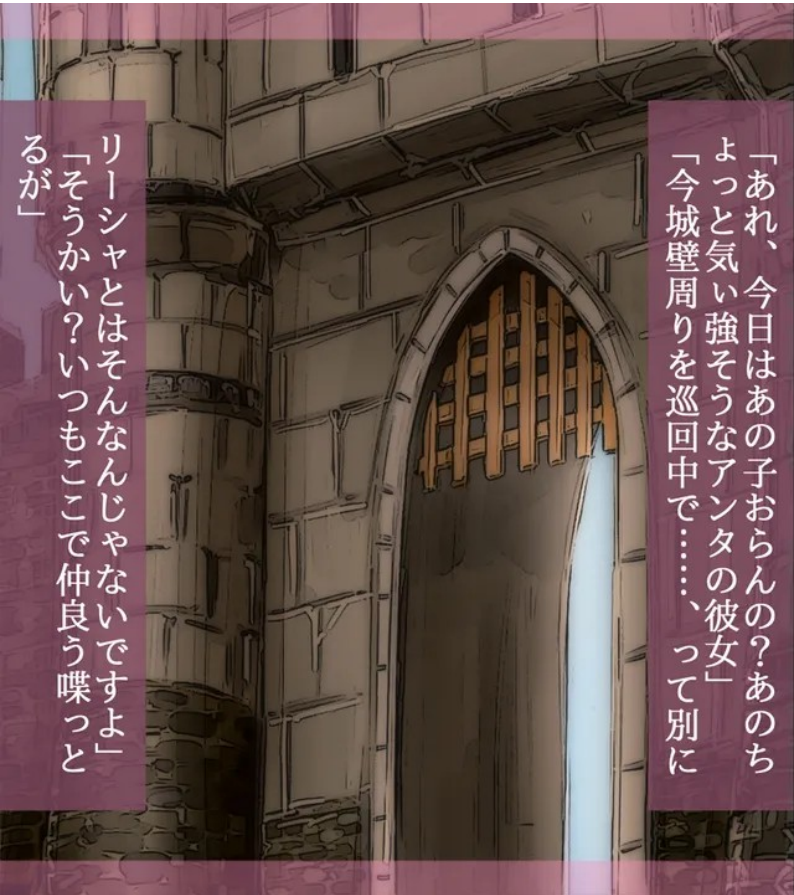
あっ♥許して♥
いやあっ♥もう♥
イってるからあ♥



そんな手持ち無沙汰な僕の気配を察したのか、知り合いの兵士のおっちゃんの話しかけてきた。

また門前には僕一人である。もっとも今日は隊長とリーシャが見回りに出ているからなのだけど。





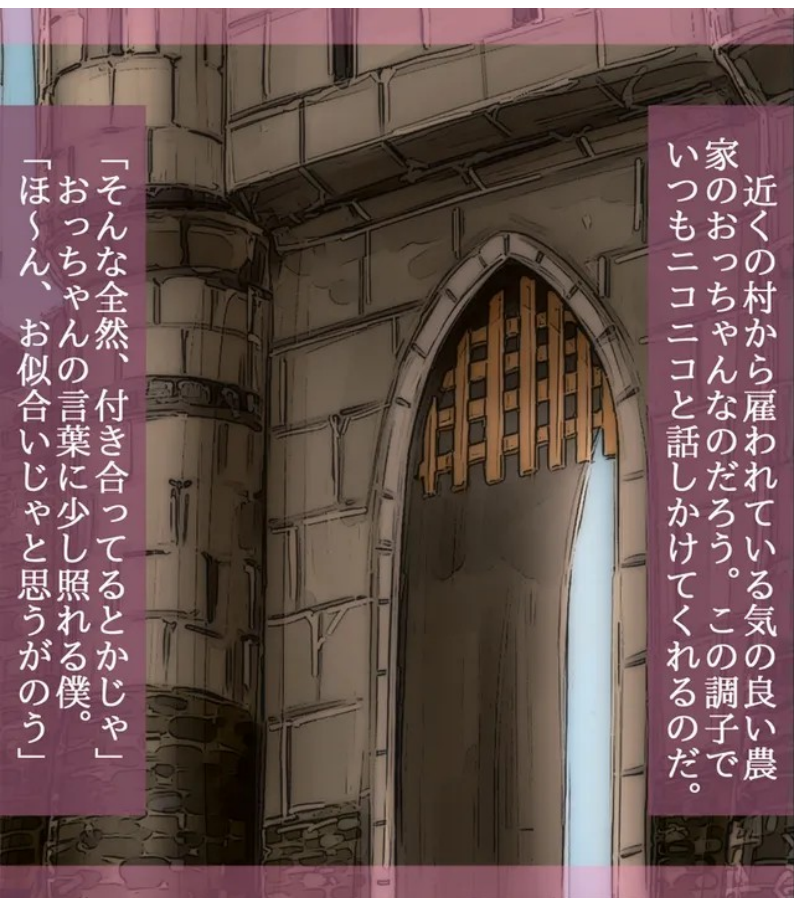
「リーシャとはそんなじゃないですよ」
「そうかい？いつもここで仲良う喋つてるが」

「あれ、今日のはあの子おらんの？あの子よっと強い強そうなアンタの彼女」
「今城壁周りを巡回中で……、って別に



さっさと啜えろ
大丈夫だつて
誰もいねえよ

おいこつち来てしゃがめ
いいからほら



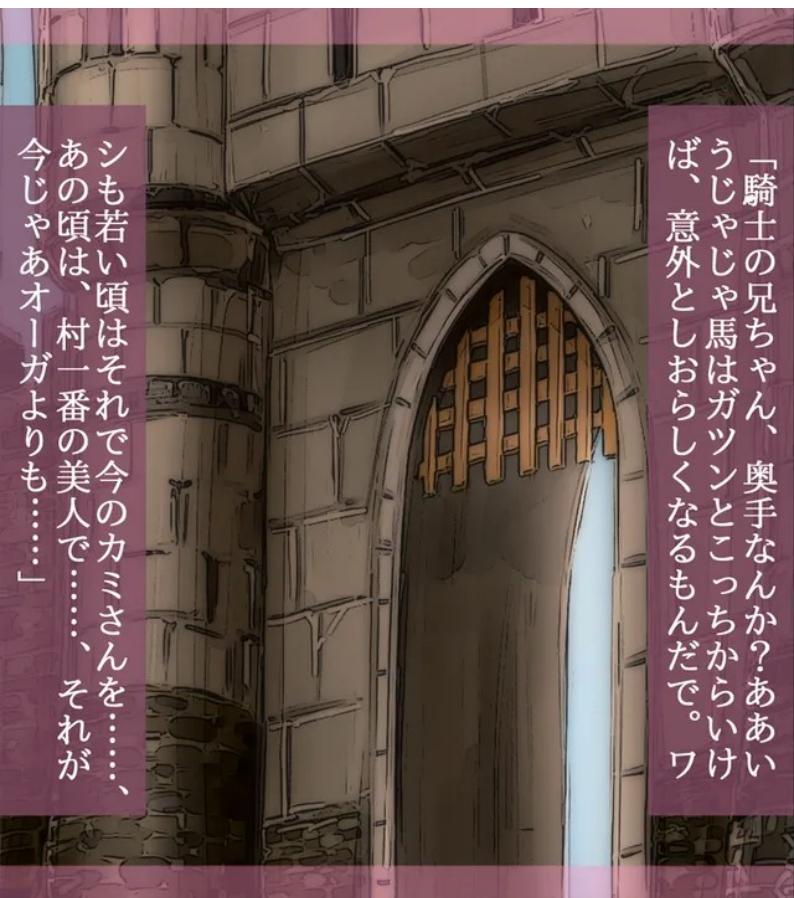
「そんな全然、付き合ってるとかじゃ
おっちゃん言葉に少し照れる僕。
「ほくん、お似合いじゃと思うがのう」

近くの村から雇われている気の良い農
家のおっちゃんなのだろう。この調子で
いつもニコニコと話しかけてくれるのだ。



いつも通り
丁寧にしゃぶれよ？

そうだお前の
大好きな隊長様の
ち●ぽだ



「しも若い頃はそれで今のカミさんを……、あの頃は、村一番の美人で……、それが今じゃあオーガよりも……」

「騎士の兄ちゃん、奥手なんか？ ああいうじやじゃ馬はガツンとこっちからいけば、意外としおらしくなるもんだで。ワ



「今じゃこんなに嬉しそうにち●ぽに吸い付きやがって」

「ちょっと前までは嫌な顔してたくせに」

「おう、戻ったぞ」
兵士のおっちゃんを入れ替わる様に
隊長達が巡回から帰ってきた。
「でな、リーシャが気分悪いから詰所で
休むんだとよ。おいリーシャ、どつ
ちに付き添って欲しい？」

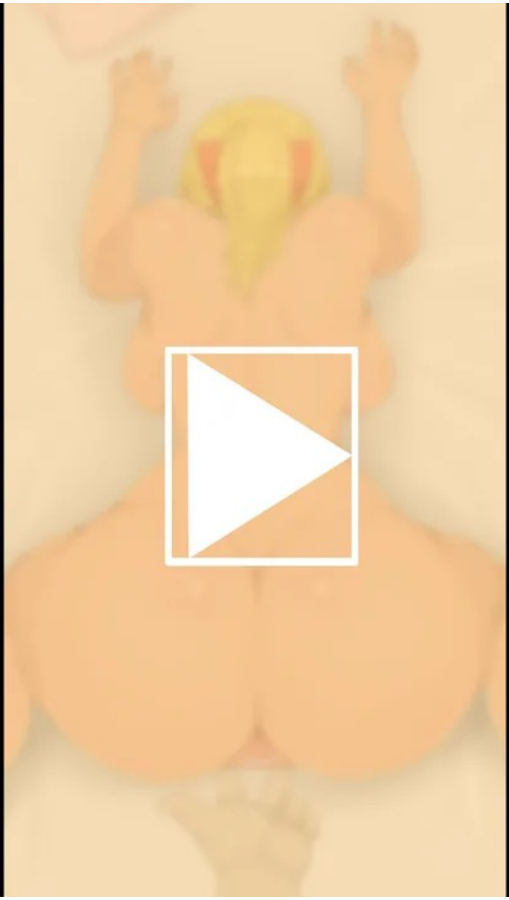


「……隊長……に」
「だそうだ。おいヒョロ男、ここは任
せた。喋ってねえで集中しろよ」
「は、はい……。了解です」
大丈夫かなリーシャ。なんか顔赤か
ったし歩き方も変だったけど……。」



「何よ、さっきからチラチラこっち見て」
「いや、別に……」
ダメだ……。先日おっちゃんに言われ

たせいで僕は変に意識してしまっていた。
見慣れたはずのリーシャの横顔が、普
段とはまるで違って見える。





「そ、そう?ならよかった」
二人を包むぎこちない空気を破る様に、
予め準備していた用件を切り出す。

「その……この前は大丈夫だった?」
「え?う、うん。ごめんね、ちよつと気分が悪くなったただけだから」

だって…
あたし…もう…♡

ち●ぽしやぶってたら
欲しくてたまらなくな
ったってかあ?



おいおい
なうこいの
なにか



素直に謝るリーシャ。
去年までの彼女ならならむしろ奢れと
言ってくるぐらいだったのに。

「そういうばさ、僕明日誕生日なんだ」
「あ、そうだったね。すっかり忘れてた。
まだ何も用意してないや」



あっ♡
焦らすのだめえっ♡

傑作だったぜ
ヒョロ男の間抜け面

ヒョロ男
ほっといてさ
隊長に…♡だもんなあ



「あの、明日なんだけど」
「なにになに？」
「夜、金の豚亭に予約取っててさ」

そういつて僕の頭を抱え乱暴に撫でる。
想像以上に柔らかな感触に戸惑う僕。
と、そこに日没の鐘が鳴り響いた。



おらっこのケツデカ女
反省しろ反省
エロい体しやがって

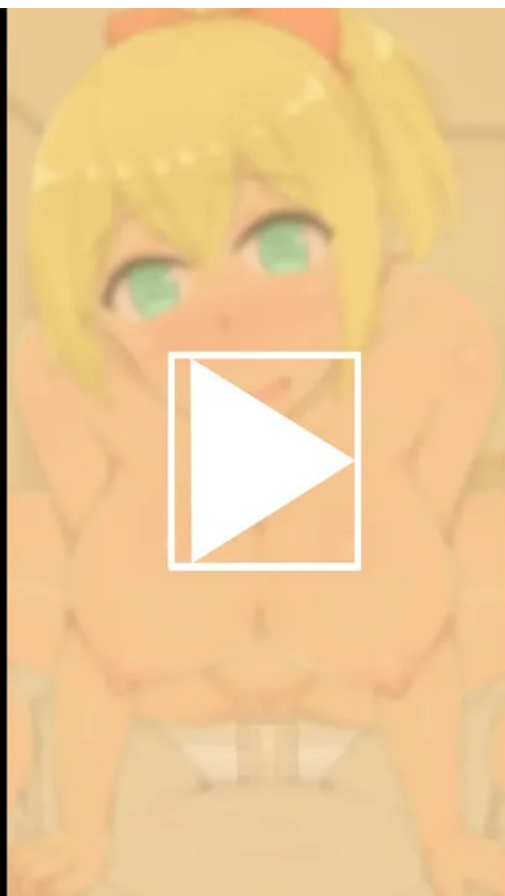
あっ♡あっ♡イクっ♡
すごっ♡奥までっ♡
あっ♡♡ああんっ♡♡

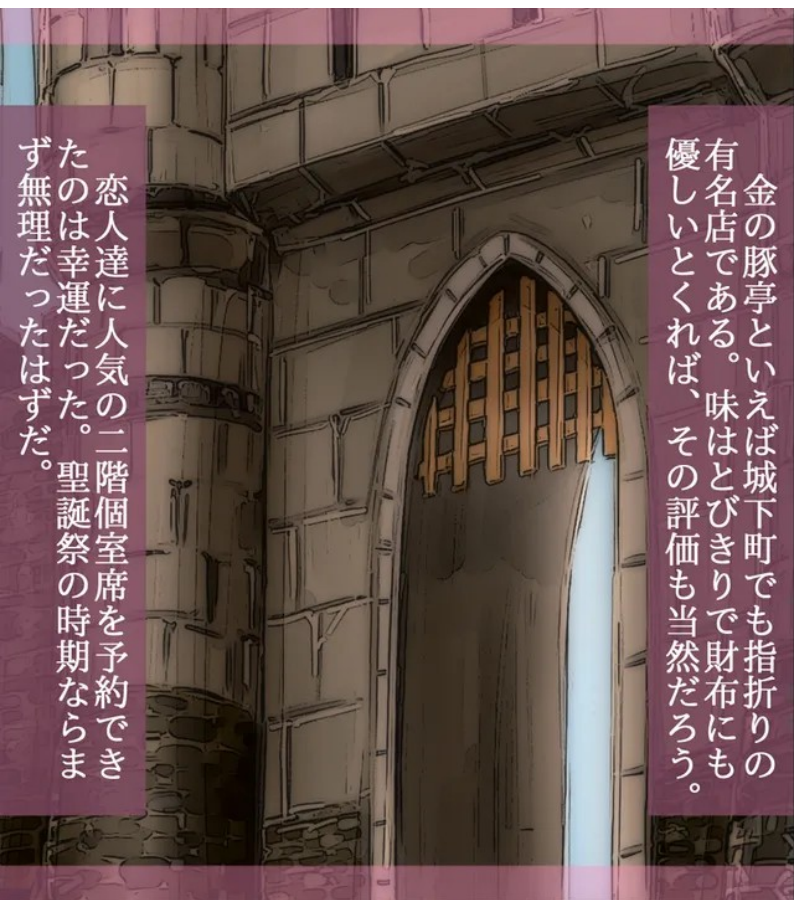
ヒョロ男みたいな童貞
困らせてすいません
ってなあ



………僕が金の豚亭から騎士団寮に帰
ってきた頃には、辺りはもうすっかり真
つ暗になっていた。

結局、リーシャは来なかったな……。
堀の暗い水面には明るい月と一緒に、
今日の浮かれた僕が映っていた。





金の豚亭といえは城下町でも指折りの有名店である。味はとびきりで財布にも優しいとくれば、その評価も当然だろう。

恋人達に人気の二階個室席を予約できたのは幸運だった。聖誕祭の時期ならまず無理だったはずだ。

あの同期のヒヨロ男

はい：その子が誕生日でお店予約してみたいで

リーシャお前今日先約があつたんだって？

は、はい誘われて夕食に



誕生日！
それ行かなくて
大丈夫？

んっ♡
それはその…
隊長に…

俺に？

部屋に
呼ばれて…
♡



給料をはたいた服に着替え、髪を整える。逸る心を抑えられずに、予約の一時間前には店に着いてしまっていた。

店員さんに事情を告げるとケーキのサービスとサプライズのロウソクでの演出を協力してくれる、という事になった。

でも断らなかつたよな
大事な約束でしかも
話があるってのに

愛の告白かもよ？
ヒヨ口男がお前に

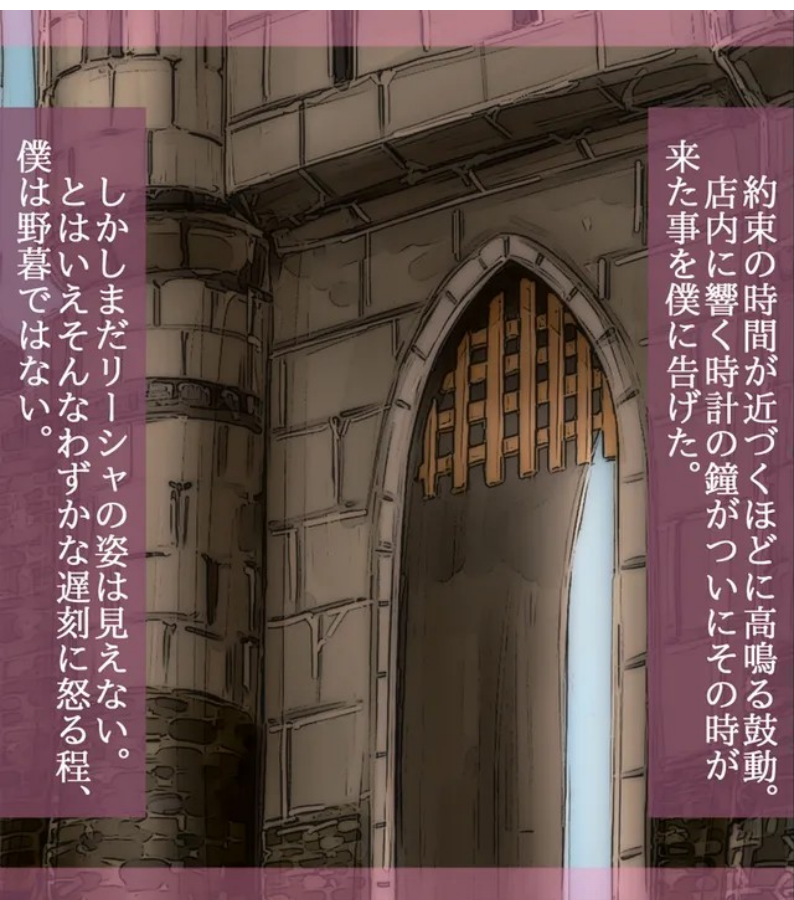
約束の時間が近づくほどに高鳴る鼓動。
店内に響く時計の鐘がついにその時が
来た事を僕に告げた。

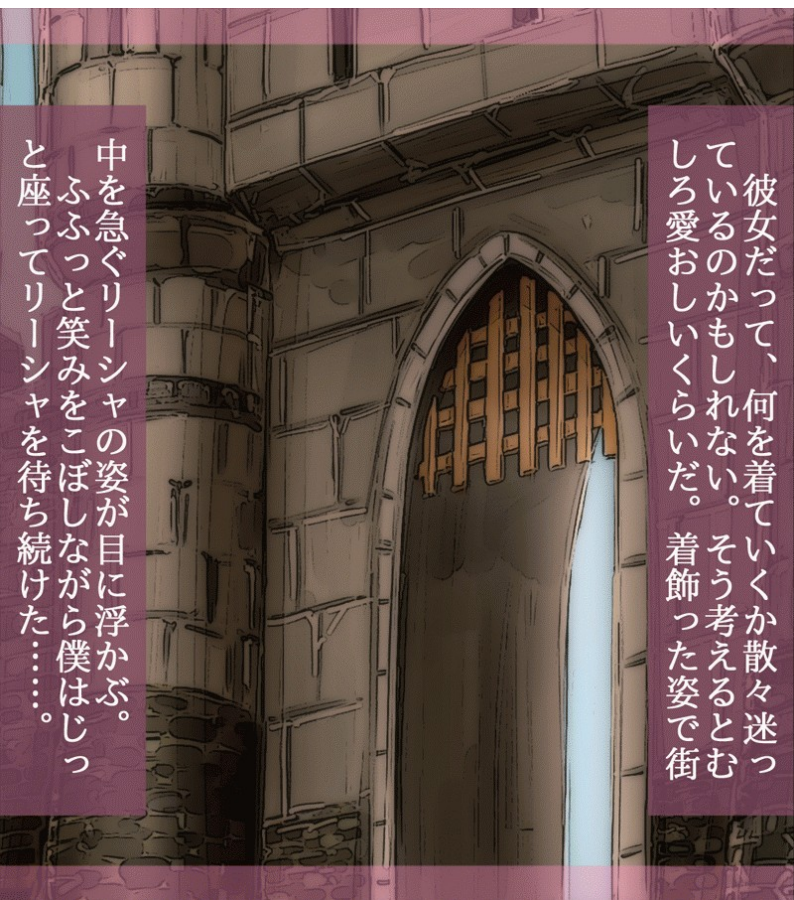
あうっ…
はあ…っ
はあ…っ

そんな…
だっ…
んっ…
♡だっ…
♡あ…
♡た…
♡し…



しかしまだリーシャの姿は見えない。
とはいえそんなわずかな遅刻に怒る程、
僕は野暮ではない。





中を急ぐリーシャの姿が目に見えかぶ。
ふふつと笑みをこぼしながら僕はじつ
と座ってリーシャを待ち続けた……。

彼女だって、何を着ていくか散々迷っ
ているのかもしれない。そう考えるとむ
しろ愛おしいくらいだ。着飾った姿で街

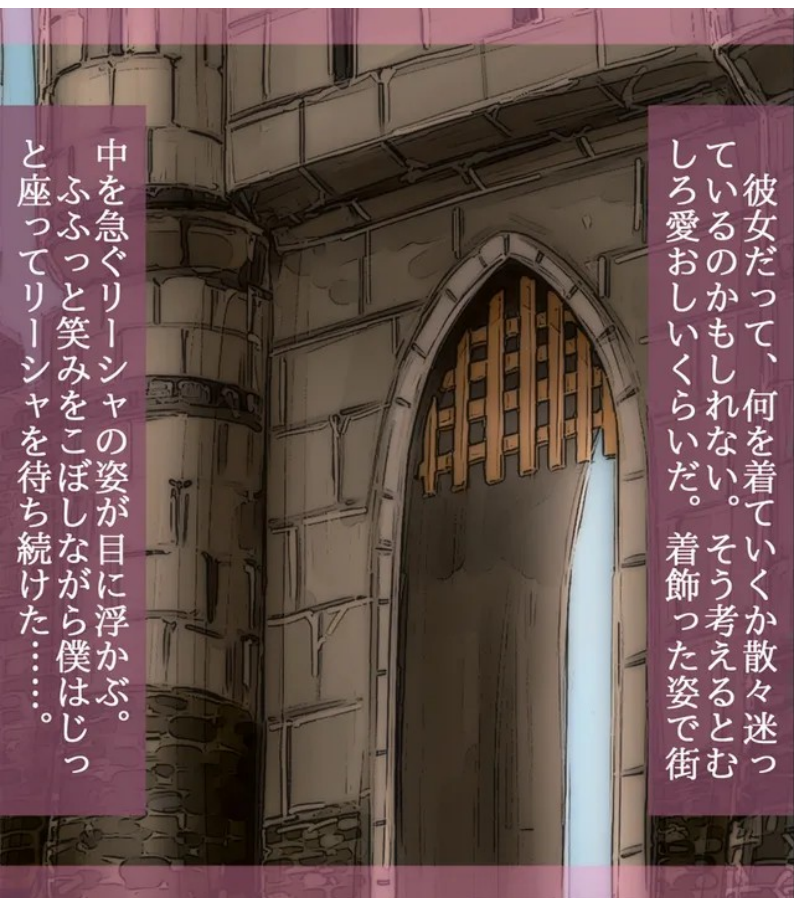


よーしじゃあ
ヒョロ男に謝らないと
ほらここ見て

すっぱかした理由
ちゃんと言つて
あげよっか

あ、あたしっ
隊長に呼ばれっ
ただけでもう体がた
おま●こがあっ♡
♡♡

あっ♡あっ♡
急にっ…
激し…っ♡



中を急ぐリーシャの姿が目に見えかぶ。
ふふっと笑みをこぼしながら僕はじつ
と座ってリーシャを待ち続けた……。

彼女だって、何を着ていくか散々迷っ
ているのかもしれない。そう考えるとむ
しろ愛おしいくらいだ。着飾った姿で街

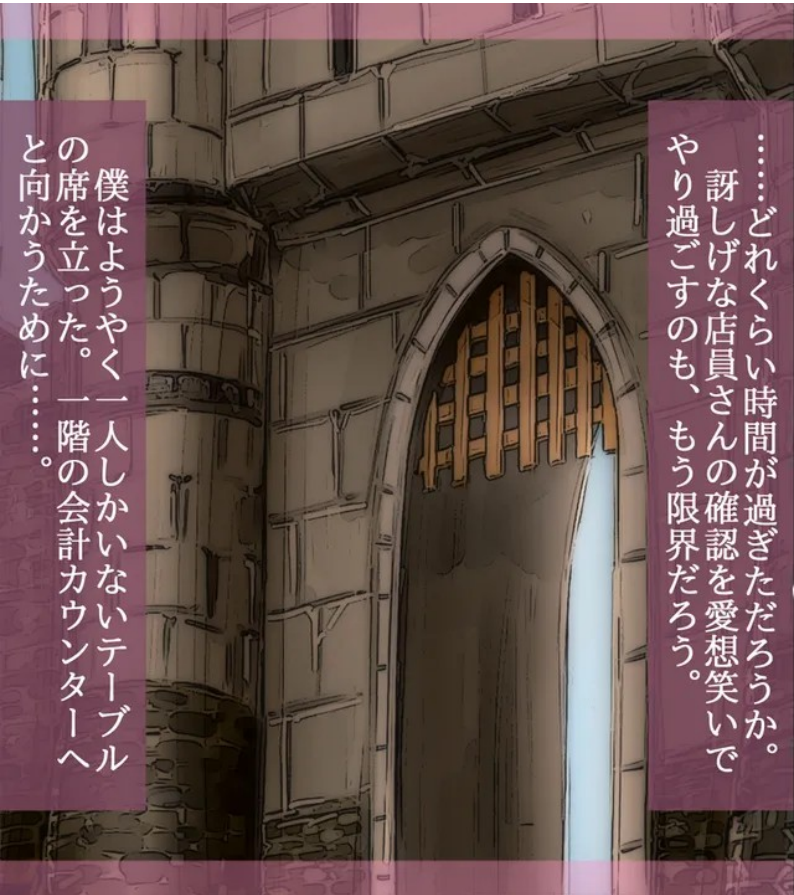


よーしじゃあ
ヒョロ男に謝らないと
ほらここ見て

すっぱかした理由
ちゃんと言つて
あげよっか

あっ♡ああっ♡
急にっ…
激し…っ♡

あ、あたしっ
隊長に呼ばれっ
ただけでもう体がたっ
おま●こがあっ♡



僕はようやく一人しかいないテーブルの席を立った。一階の会計カウンターへと向かうために……。

……どれくらい時間が過ぎただろうか。訝しげな店員さんの確認を愛想笑いでやり過ごすのも、もう限界だろう。

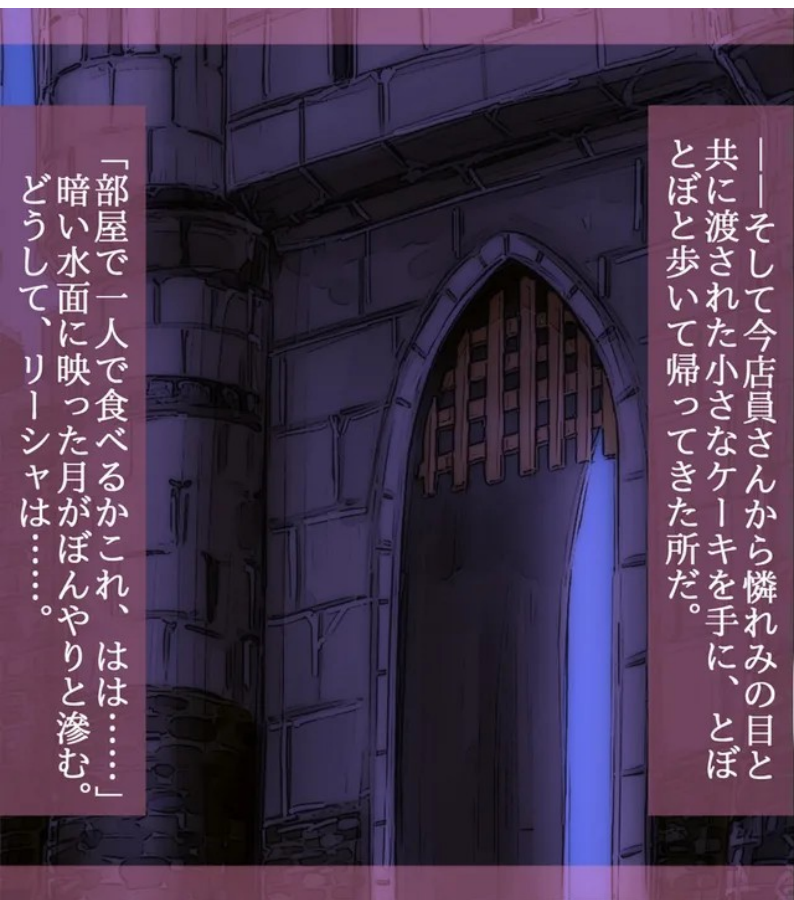


部屋来てすぐに物欲しそうな顔してたもんなあ

おいおい
リーシャま●こ
ちよろすぎんだろw

あいつと話してる時も
ずっと隊長のおち●ぽの
事で頭のおっぱい●ぽの
だっただのおっぱい●ぽの

グチャグチャに濡れたい隊長
ちやっとなハメられたくて
おち●ぽのつれたい
我慢できないのっ



「部屋で一人で食べるかこれ、はは……」
暗い水面に映った月がぼんやりと滲む。
どうして、リーシャは……。

——そして今店員さんから憐れみの目と
共に渡された小さなケーキを手に、とぼ
とぼと歩いて帰ってきた所だ。

ヒョロ男見ってる？
これ俺からの誕生日祝いね♡
今夜はこれでシコレよ♡w

選んじやった……♡
明日は隊長とあたし非番
だから一日中本気種付け
セックスの予定だよ♡



なんかかわいいそう
だからさ♡ヒョロ男に
ほらお祝いメッセージ

誕生日おめでとう♡
ごめんね……♡今日いけ
なくて……あんたとの約束
より隊長のおち●ぽ

暗い廊下の床で何か光っている。
丁度僕の部屋の前だ。近づいて見る
とそれは映昌機だった。おそらくはボ
ーマン隊長の物だろう。なぜなら僕達
新人の分はまだ届いていないからだ。
しかしなぜこんな所に？訝りながら



も、そっと拾い上げてみる。士官学校
で使っていた物とほぼ同じだ。起動し
たままなのだろう、画面が光っている。
ん？動画、か？これって……。
僕は思わず再生ボタンを押した……。
く騎士編完く

